彙　　報

会 長 上 野 善 道

著作物取り扱い規程の制定について

2006年度第2回委員会において新たに著作物取り扱い規程が制定されました．審議の報告は次号に掲載されますが，少しでも早く本規程についてお知らせするために本号に掲載します．

日本言語学会著作物取り扱い規程

（目的）

1. 本規程は，『言語研究』に掲載される論文等の著作物（以下，著作物と言う）に関して，著者と日本言語学会（以下，学会と言う）の双方にとって不都合が生じないように，取り扱いを定めるものである．

（学会による複製権・公衆送信権の行使の許諾）

2. 『言語研究』に掲載された論文等著作物のうち，著者が明示されている著作物の国内外における複製権および公衆送信権（以下，複製権等と言う）の行使は，著者から学会のみに許諾される．著者が明示されていない著作物の国内外における複製権等は，すべて学会に帰属する．著者は，著作物を『言語研究』に投稿した時点で本規程を了承したものとし，著作物の複製あるいはインターネット等による著作物の公開（以下，著作物の複製等と言う）を行う場合は，本規程に従うものとする．

（配布先が限定されている複製等）

3. 『言語研究』に掲載された著作物は，教育・研究の目的であることが明確であり，かつ配布先が授業の受講者，研究会の聴衆，研究グループ，研究助成機関・団体など特定の者に限定される場合は，複製等を行う者が当該著作物の著者であるかどうかに関係なく，出典を明示することを条件に，学会への通知なしに複製等を行い，利用することができる．

（著者が複製等を行う条件）

4. 著者が，自らあるいは第三者を通じて，自らの著作物について著作物の複

製等を行う場合は，第3項に示されている場合を除き，事前に学会に通知するとともに，著作物の出典として，学会名称，『言語研究』誌名，当該号・ページに言及し，著作物の原典が印刷刊行された『言語研究』に掲載されているものであることを明記しなければならない．著作物の複製等において誤植・誤記の訂正や加筆などを行った場合は，その旨を明記しなければならない．複製等により著者に支払われる対価について，学会は許諾された複製権等を理由に権利を主張してはならない．

（著者が論文集への再録を行う条件）
5. 著者は，第4項の条件を満たしていれば，自らあるいは第三者を通じて，『言語研究』に掲載された著作物を新たに編纂される論文集に収録し刊行することができる．また，これにより著者に支払われる対価について，学会は許諾された複製権等を理由に権利を主張してはならない．

（学会が複製等を行う条件）
6. 学会が，自らあるいは第三者を通じて，著作物の複製等を行う場合は，著者を含む学会会員に広く利益をもたらすものでなければならない．また，著作物の複製等を行うことについて委員会の承認を得なければならない．

（複製等による学会への収入）
7. 著作物の複製等により第三者より学会に対価が支払われた場合は，学会の収入とする．

（学会が論文集への再録を行う条件）
8. 学会が，自らあるいは第三者を通じて，『言語研究』に掲載された著作物を新たに編纂される論文集に収録し刊行する場合は，第6項に示された条件に加え，事前に著者に通知することとする．

（著者が第三者の著作権を侵害した場合）
9. 第三者の申し出等により『言語研究』に掲載された著作物が第三者の著作権を侵害していることが明らかになった場合，すべての責任は著者が負うものとする．

（本規程制定以前の著作物）
10. 本規程制定以前の著作物についても，学会は本規程に従って取り扱うことができるものとする．ただし，本規程制定以前に『言語研究』に掲載された著

作物の著者から異議の申し立てがあった場合は，双方に不利益が及ばないための解決を協議するものとする.

（2006 年 11 月 18 日委員会決定）

会員名簿の誤記のお詫びと訂正

2006 年 1 月に印刷・発行した『日本言語学会会員名簿』の賛助会員の項に誤記がありました．下のように訂正し，ご迷惑をおかけした株式会社三省堂ならびに株式会社三省堂書店に心よりお詫び申し上げます.

『日本言語学会会員名簿」（2006 年 1 月）108 ページ

誤：（株）三省堂　西東京営業所 180-0023　東京都武蔵野市境南町 1-8-1
　　ドミネントビル 1F　0422-32-8191

正：（株）三省堂　101-8371　東京都千代田区三崎町 2-22-14　03-3230-9412

2006 年度第 1 回常任委員会

日　時：2006 年 5 月 13 日（土）15:00〜19:00

場　所：東京大学文学部 3 号館 6 階言語学研究室

出席者：上野善道（会長），林　　徹（事務局長），上山あゆみ，風間伸次郎，菊地康人，窪薗晴夫，田窪行則，田野村忠温，柘植洋一，早津恵美子

オブザーバー：影山太郎（編集委員長），樋口康一（大会運営委員長），郡司隆男（広報委員長），梅谷博之（事務局長補佐）

［報告事項］

（1）　常任委員会のメンバーの紹介が行なわれた.

（2）　各委員会・小委員会の引継ぎについて

- 編集委員会，大会運営委員会，広報委員会の新任委員の名前が紹介された.
- 各委員会と緊密な関係を維持するため，各委員会のメーリングリストに会長と事務局長を登録してほしい旨の要請が会長よりあった.

（3）2003 年度に作成された「各種委員会・小委員会旅費等ガイドライン」及び「大会における公開講演，シンポジウム講師等の謝礼等について」を一部修正し，これらに沿った予算執行を各委員長に要請した.

（4）提出予定の平成 18 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）交付申請書の内容について編集委員長から報告があった.

［審議事項］

（1） 2005年度決算報告

- 2005年度決算について報告があり，了承された．［別表1］参照．
- 会計監査委員からの意見をもとに，積立金について審議し，積立金は古いものから順次使用し，その上で必要ならば新たに積み立てることを了承した．
- 会計監査委員からの意見をもとに，大会会場校の支出報告の方法について審議し，今後は事務局が準備した雛形に従って報告を求めることにした．

（2） 2006年度予算案

2006年度予算について常任委員会原案を作成した．［別表2］参照．

（3） 小委員会が実施する活動で，予算執行を伴うものの計画書

各小委員会に対し，今後の予算執行を伴う活動について計画書の作成を求めることにした．

（4） 第132回大会について

第132回大会（2006年度春季大会・於東京大学）のポスター及びプログラムについて検討した．本大会のポスター及びプログラムには口頭発表の司会者を記載しないことを了承した．ただし，発表者等の便宜のため，予稿集とウェブサイトには記載することにした．

（5） 第133回大会について

第133回大会（2006年秋季大会）が11月18日，19日に札幌学院大学で開催されることが提案され了承された．

（6） 第134回以降の大会の会場校について

候補校について意見交換を行なった．

（7） 電子アーカイブ化について

- 独立行政法人科学技術振興機構から届いたJ-STAGE（同機構が構築した「科学技術情報発信・流通総合システム」）に関するアンケートに回答することを決定した．
- 電子アーカイブ化に関わる著作権の問題，およびJ-STAGE以外のシステムに関して，今後，広報委員長を中心に情報収集し，広報委員会および常任委員会のメーリングリストで議論することにした．

（8）『言語研究』の執筆要項および投稿規定改訂案について

編集委員長より提出された案について意見交換した．

（9）『言語研究』の特別編集委員について

特別編集委員が担うべき役割，編集委員会での立場について意見交換した．

(10)　役員による会員個人情報の利用について

編集委員長，大会運営委員長，事務局長が，それぞれ印刷したものを1部ずつ持つことにした.

なお，議事終了後，特別編集委員に関する議論をメーリングリストにて行ない，会則第20条第4項の注記の改訂案をまとめた.［別記1］参照.

2006年度第1回委員会

日　時：2006年6月17日（土）10:00〜12:30

場　所：東京大学（駒場キャンパス）ファカルティハウス1階セミナールーム

出席者：上野善道（会長），林　　徹（事務局長），井出祥子，上山あゆみ，荻野綱男，生越直樹，尾上圭介，影山太郎，風間伸次郎，梶　茂樹，加藤重広，菊地康人，金水　敏，工藤真由美，窪薗晴夫，熊本　裕，呉人　恵，郡司隆男，小泉　保，小泉政利，坂原　茂，坂本　勉，坂本比奈子，清水克正，杉浦滋子，砂川有里子，田窪行則，田野村忠温，柘植洋一，角田太作，津曲敏郎，外池滋生，長嶋善郎，野田尚史，早津恵美子，樋口康一，日比谷潤子，藤代　節，藤本幸夫，堀江薫，峰岸真琴，三原健一，藪　司郎，湯川恭敏，吉田　豊，鷲尾龍一，渡辺　己（以上47名）

委任状：18名

オブザーバー：井上和子（顧問），庄垣内正弘（顧問），早田輝洋（顧問），佐々木冠（第133回大会実行委員長），佐藤昭裕（会計監査委員），吉田和彦（会計監査委員），松村一登（前会計監査委員），梅谷博之（事務局長補佐）

議事に先立ち，出席者の自己紹介が行なわれた.

［報告事項］

（1）　第132回大会（2006年度春季大会，東京大学）について

大会実行委員長の坂原茂氏より挨拶があった.

（2）　平成18年度（2006年度）科学研究費補助金（研究成果公開促進費）について

2006年6月9日付で平成18年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付決定通知があった．260万円の申請に対し，230万円が交付されることとなった.

（3）　2006年度第1回常任委員会について

2006年5月13日に行なわれた本年度第1回常任委員会について報告があった.

（4） 各種委員会等の活動報告

・編集委員会

新委員および特別編集委員の名前が紹介された．また，4月15日に委員会が開かれ，編集方針について，投稿規定・執筆要項の改訂について，特別編集委員について，それぞれ審議したことが報告された.

・大会運営委員会

新委員の名前が紹介された．また，第132回大会の応募・採用状況が報告され，口頭発表は61件中31件，ポスター発表は5件中4件，ワークショップは2件中2件が採択された.

・広報委員会

新委員の名前が紹介された．また，第132回大会開催に伴うウェブサイトの更新，電子アーカイブ化についてのJSTのアンケートへの対応などが報告された.

・夏期講座小委員会

2006年6月16日に夏期講座実行委員とともに会議を開いたこと，及び夏期講座が2006年8月21日〜8月26日に東京大学駒場キャンパスで開催されることが報告された.

・CIPL

次回（第18回）国際言語学者会議が2008年7月21日〜7月26日にソウルで開催されることが報告された.

・東洋学・アジア研究連絡協議会

2004年12月11日に行なわれた東洋学連絡協議会設立大会に出席した後は特に報告すべき活動は行なっていないこと，および，東洋学連絡協議会の新しい担当者を決める必要があることが報告された．また，2010年に日本で開催されるICANAS会議に日本言語学会がどう関わるかを執行部で決めておく方がよいという提案があった.

［審議事項］

（1） 2005年度決算について

2005年度決算報告があり承認された．これは2006年4月19日に梶茂樹，松村一登両会計監査委員によって適正と認められたものである．［別表1］参照.

（2） 2006年度予算について

2006年度予算案を審議し，原案に従って承認した．［別表2］参照.

（3） 第133回大会（2006年度秋季大会）について
11月18日，19日に札幌学院大学で開催することが提案され．承認された．

（4）「危機言語」小委員会について
新委員候補の名前が紹介され，承認された．また，呉人恵氏が委員長となることが承認された．さらに，委員長より活動報告があった．

（5）『言語研究』の投稿規定・執筆要項の改訂について
- 編集委員長より投稿規定改訂案が出され，審議の上承認した．主な改訂内容は，他誌に投稿中の原稿を『言語研究』に投稿できないことを明記した点である．［別記2］参照．また，投稿規定の改訂に従って，英文版も改訂した．
- 編集委員長より執筆要項を改訂したことが報告された．主な改訂内容は，会員が投稿できるカテゴリーを明記した点，原稿に通し番号をつけることを付け加えた点，参照文献の記載方法を例で示しより簡潔にした点，参照文献の雑誌論文の巻・号数記載方法に関する説明を付け加えた点である．［別記3］参照．また，執筆要項の改訂に従って，英文版も改訂した．

（6） 会則第20条第4項の注記の変更について
会則第20条第4項の注記の変更案を審議の上承認した．主な変更点は非会員の特別編集委員が『言語研究』に投稿するときには，会員に準じる扱いとしたことである．［別記1］参照．

（7） 選挙管理委員の選出
選挙管理委員の選挙を行ない，井上　優，荻野綱男，生越直樹，風間伸次郎，坂本比奈子，高見健一，外池滋生，日比谷潤子の各氏（計8名）を選出した．次点は鷲尾龍一氏であった．

（8） その他
134回大会以降の会場候補についての情報提供，会員勧誘への協力，自動引き落としによる会費納入制度の積極的な利用への呼びかけが会長よりあった．

［別記 1］言語学会会則（注記）の変更

注記

第 20 条第 4 項について

（旧）	（新）
特別編集委員は，『言語研究』の海外における広報活動・編集作業の支援をする（具体的には，会員を募り，投稿を薦める，査読委員の選定等に関する助言をする等）．編集委員会のメンバーとはならない．特別編集委員には『言語研究』を寄贈する．	特別編集委員は，編集委員長からの依頼により，『言語研究』の編集作業の支援や海外における広報活動を行う（具体的には，査読を行う，査読担当者の選定等に関する助言を行う，会員を募り投稿を薦める等）．特別編集委員には『言語研究』を寄贈する．また，非会員の特別編集委員が投稿するときは，会員に準じる扱いとする．

［別記 2］投稿規定の改訂

（旧）	（新）
投稿規定	投稿規程
	4　他誌に応募中の原稿は投稿できない．［本項の追加に伴い，旧投稿規定 4 項以降の番号が一つずつ繰り下がった．］
4　論文の執筆は原則として本誌各号巻末に掲載した「執筆要項」に従うこととする．	5　論文の執筆は原則として最新の「執筆要項」に従うこととする．
10　論文，書評論文，書評・紹介の執筆者には，本誌 1 部と抜刷 20 部を無料で呈する．［以下省略］	11　執筆者には，本誌 1 部と抜刷 20 部を無料で呈する．［以下省略］

［別記 3］『言語研究』執筆要項の改訂

（旧）

2　提出部数ならびに様式：

［中略］

b.　原稿はA4判用紙，上下左右に2.5 cmのマージンをとり，12ポイント文字で1頁に25行横書きで書く．図，表，文献等を含め，邦文論文・欧文論文ともに，40頁（邦文の場合，400字詰原稿用紙90枚程度，欧文の場合，15,000語程度に相当）以内，［以下省略］

c.　原稿は，以下の順序，体裁で整える．

（新）

1　投稿原稿のカテゴリー：会員が投稿できるカテゴリーを次の4つとする．

a.　論文（完成した研究論文）

b.　フォーラム（aのカテゴリーに属さない小論文や萌芽的な研究，他者の論考に対する批判的考察など）

c.　書評論文（他者の出版物に対する批判的考察で独自の提言を含む論文）

d.　書評・紹介（他者の出版物に対する短評）

［本項の追加に伴い，旧執筆要項第1項以降の番号が一つずつ繰り下がった．］

3　提出部数ならびに様式：

［中略］

b.　原稿はA4判用紙，上下左右に2.5 cmのマージンをとり，12ポイント文字で1頁に25行横書きで書く．図，表，文献等を含め，邦文論文・欧文論文ともに，40頁以内（邦文の場合，400字詰原稿用紙90枚程度，欧文の場合，15,000語程度に相当），［以下省略］

c.　原稿は，以下の順序，体裁で整える．表紙を除き，論文本体，注，参照文献，要旨の総てのページに通し番号をつける．

表紙　論文名（副題を含む．欧文の場合は日本語訳，邦文の場合は欧文訳を添える），執筆者名（ふりがな），所属機関（ない場合は「なし」と明記），連絡先（郵便番号，住所，電話番号，ファクス番号，E-mail アドレス）．

論文　本文第一項目の初めに論文名（副題も含む）を書き，［以下省略］

4　例文表記：例文は，丸括弧の中に通し番号を付け，独立の行に字下げして書く．執筆言語と異なる言語の例文には，必要に応じて，各単語（場合によっては形態素）毎にグロスを，そして全文の訳を以下のいずれかの方法に準じて付ける．また，使用する略語は別途説明する．

［中略］

（3）b-a　naa-sh-nish.
3目的-受益　副詞-1単主語-働く
私は彼のために働く．［以下省略］

5　注および参照文献：

［中略］

f.　各項には，著（編）者名，発行年，論文名，頁等を以下（句読点も含む）に準じて記載する．

表紙　投稿原稿のカテゴリー名，表題（副題を含む．欧文の場合は日本語訳，邦文の場合は欧文訳を添える），執筆者名（ふりがな），所属機関（ない場合は「なし」と明記），連絡先（郵便番号，住所，電話番号，ファクス番号，e-mail アドレス）．

論文本体　冒頭に論文名（副題も含む）を書き，［以下省略］

5　例文表記：例文は，丸括弧の中に通し番号を付け，独立の行に字下げして書く．執筆言語と異なる言語の例文には，必要に応じて，各単語ごと（場合によっては形態素ごと）にグロスを，そして全文の訳を以下のいずれかの方法に準じて付ける．また，使用する略語は別途説明する．

［中略］

（3）b-a　naa-sh-nish.
3目的-受益　副詞-1単主語-働く
「私は彼のために働く．」［以下省略］

6　注および参照文献：

［中略］

f.　各項には，著（編）者名，発行年，論文名，頁等を以下（句読点も含む）に準じて記載する．

［邦文雑誌論文］第1著者名・他の著者名（発行年）「論文名」『雑誌名』巻数：頁数.

例　佐久間鼎（1941）「構文と文脈」『言語研究』9: 1–16.

［欧文雑誌論文］(first) Author's surname, Given name(s) or initial(s) "and" Given name Surname of other authors "(Year of publication)" Full title and subtitle of the work. *Full name of the journal (in italics)* Volume number (roman type): Inclusive page numbers for the entire article.

例　Postal, Paul (1970) On the surface verb "remind". *Linguistic Inquiry* 1: 37–120.

［**雑誌論文**］第1著者名・他の著者名（発行年）「論文名」『雑誌名』巻数：頁数.（巻全体で通しの頁番号が打たれている場合は巻数だけで，号数は不要．号ごとに頁番号が付けられている場合のみ，巻数と号数を記す.）

例　佐久間鼎（1941）「構文と文脈」『言語研究』9: 1–16.

例　服部四郎（1976）「上代日本語の母音体系と母音調和」『言語』5(6): 2–14.

例　Postal, Paul (1970) On the surface verb "remind". *Linguistic Inquiry* 1: 37–120.

例　Kay, Paul and Chad K. McDaniel (1978) The linguistic significance of basic color terms. *Language* 54: 610–646.

［邦文論文集の論文］第1著者名・他の著者名（発行年）「論文名」編者名（編）『論文集名』頁数．出版地：出版社.

例　金田一京助（1955）「アイヌ語」市河三喜・服部四郎（編）『世界言語概説』下：727–749．東京：研究社.

［**論集などに所収の論文**］第1著者名・他の著者名（発行年）「論文名」編者名（編）『論文集名』頁数．出版地：出版社.

例　金田一京助（1955）「アイヌ語」市河三喜・服部四郎（編）『世界言語概説』下：727–749．東京：研究社.

［欧文論文集の論文］(first) Author's surname, Given name(s) or initial(s) "and" Given name Surname of other authors "(Year of publication)" Full title and subtitle of the work. "In": Full name(s) of editor(s) "(ed(s).)" *Title of the book* (in italics), Inclusive page numbers. Place of publication: Publisher.

例 Kiparsky, Paul (1968) Linguistic universals and linguistic change. In: Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.) *Universals in linguistic theory*, 171–202. New York: Holt, Rinehart and Winston.

例 Kiparsky, Paul (1968) Linguistic universals and linguistic change. In: Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.) *Universals in linguistic theory*, 171–202. New York: Holt, Rinehart and Winston.

［邦文単行本］第1著者名・他の著者名（発行年）書名．版，（適用できる場合は）巻号数，シリーズの場合はそのタイトル．出版地：出版社．

例 柴谷方良（1978）『日本語の分析』東京：大修館書店．

［**単行本**］第1著者名・他の著者名（発行年）書名．（必要な場合は）版，（該当する場合は）シリーズのタイトルと巻号．出版地：出版社．

例 柴谷方良（1978）『日本語の分析』東京：大修館書店．

［欧文単行本］(first) Author's surname, Given name(s) or initial(s) "and" Given name Surname of other authors "(Year of publication)" *Full title and subtitle of the book* (in italics). The edition, Volume or part number (if applicable) and series title (if any), Place of publication: Publisher.

例　Haegemann, Lilliane (1994) *Introduction to government and binding theory*. Second edition. Oxford: Basil Blackwell.

［邦文学位論文］著者名（提出年）「論文名」学位論文の種類，大学名.

例　南西太郎（2005）「南西語音韻論研究」博士論文，南西大学.

［欧文学位論文］Author's surname, Given name(s) or initial(s) "(Year of submission)" Full title and subtitle of the thesis. Type of thesis. Name of the University.

例　Sag, Ivan (1976) Deletion and logical form. Unpublished doctoral dissertation, MIT.

［中略］

邦文で執筆された単行本，論文等を欧文の論文で引用する場合には，それぞれ［欧文単行本］［欧文雑誌論文］等に準ずることとする.

［中略］

例　林四郎・南不二男（編）(1974)『世界の敬語』，敬語講座第8巻. 東京：明治書院.

例　Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to government and binding theory*. Second edition. Oxford: Basil Blackwell.

例　Jakobson, Roman, Gunnar Fant and Morris Halle (1963) *Preliminaries to speech analysis: The distinctive features and their correlates*. Cambridge, MA: MIT Press.

［学位論文］著者名（提出年）「論文名」学位論文の種類，大学名.

例　南西太郎（2005）「南西語音韻論研究」博士論文，南西大学.

例　Sag, Ivan (1976) Deletion and logical form. Unpublished doctoral dissertation, MIT.

［中略］

邦文で執筆された単行本，論文を欧文論文で引用する場合は，上記の欧文文献の表記に準ずることとする.

［中略］

以下にアルファベット順に配列した例を示す.

Bloomfield, Leonard (1933) *Language*. New York: Holt.

Haegemann, Lilliane (1994) *Introduction to government and binding theory*. Second edition. Oxford: Basil Blackwell.

［中略］

Lakoff, George (1986a) *Women, fire and dangerous things: What categoriesreveal about the mind.* Chicago: University of Chicago Press.

——————— (1986b) Cognitive semantics. Berkeley Cognitive Science Report 36.

——————— and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.

［中略］

以下にアルファベット順に配列した例を示す.

Bloomfield, Leonard (1933) *Language*. New York: Holt.

Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to government and binding theory*. Second edition. Oxford: Basil Blackwell.

Jakobson, Roman, Gunnar Fant and Morris Halle (1963) *Preliminaries to speech analysis: The distinctive features and their correlates.* Cambridge, MA: MIT Press.

金田一京助（1932）『国語音韻論』東京：刀江書院.

［中略］

Lakoff, George (1986a) *Women, fire and dangerous things: What categories reveal about the mind.* Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, George (1986b) Cognitive semantics. Berkeley Cognitive Science Report 36.

Lakoff, George and Mark Johnson (1980) Metaphors we live by. Chicago: University of Chicago Press.

［中略］

本文および注における参照文献への言及は以下の要領に準じて行なう．必要に応じて著者名をフルネームで記してもよい．

この問題については，山田（1908）も論じているように……

Sapir (1925) notes that...

山田（1908: 584）は，「……助詞は単独にては何等の観念をもあらはし得ず，他の観念語に附属して始めて其の義を認むるを得るのみ」と言う．

Bloomfield (1933: 347) remarks that: ‘The assumption that the simplest classification of observed facts is the true one, is common to all sciences...’［以下省略］

本文および注における参照文献への言及は以下の要領に準じて行う．必要に応じて著者名をフルネームで記してもよい．

この問題については，山田孝雄（1908）も論じているように……

山田（1908: 584）は，「助詞は単独にては何等の観念をもあらはし得ず，他の観念語に附属して始めて其の義を認むるを得るのみ」と言う．

Sapir (1925) notes that...

Bloomfield (1933: 347) remarks as follows: “The assumption that the simplest classification of observed facts is the true one, is common to all sciences...”［以下省略］

［別表 1］2005 年度日本言語学会決算

自　2005 年 4 月　　至　2006 年 3 月　　（単位：円）

収入		支出	
科目	金額	科目	金額
会費	13,630,000	刊行費	5,607,267
雑誌売上	1,429,000	発送費	447,090
科学研究費補助金	2,600,000	事務委託費	4,284,000
預金金利	2,075	大会関係費	3,595,095
大会関係収入	2,045,000	委員会費	192,755
雑収入	55,547	編集委員会費	293,300
基金からの繰入	2,000,000	大会運営委員会費	816,120
雑益	1,900	広報委員会費	396,677
		常任委員会費	480,702
		「危機言語」小委員会費	95,043
		夏期講座小委員会費	58,210
		事務局費	642,735
		危機言語シンポジウム会計へ支出	903,091
		ＣＩＰＬ負担金	110,000
		東洋学・アジア研究連絡協議会運営分担金	2,000
		通信費	460,313
		消耗品費	237,742
		雑費	6,300
		名簿作成費	2,466,650
		選挙関係費	833,170
		（基金への繰入）	
		危機言語プロジェクト積立金	300,000
収入合計	21,763,522	支出合計	22,228,260
前期繰越金	1,543,470	次期繰越金	1,078,732
計	23,306,992	計	23,306,992

〈特別会計〉 ※詳細は別記（2005 年度危機言語シンポジウム決算）参照

収　入		支　出	
科　目	金　額	科　目	金　額
言語学会事務局から入金	903,091	危機言語シンポジウム費	903,091
収　入　合　計	903,091	支　出　合　計	903,091

◇収入内訳（単位：円）

会費

国内個人会員	11,616,500
国内維持会員	130,000
国内学生会員	748,000
国内団体会員	770,000
国内賛助会員	30,000
在外個人会員	271,500
在外維持会員	20,000
在外学生会員	44,000
合　計	13,630,000

雑誌売上

三省堂書店	34,650
松香堂書店（取り次ぎ業務委託）	1,008,700
丸善	245,700
その他書店	56,700
事務局販売	83,250
合　計	1,429,000

科学研究費補助金　2,600,000

預金金利　2,075

大会関係収入

130 回大会出店料（8 店）	80,000
130 回大会出店料（2 店）一日のみ	10,000
131 回大会出店料（4 店）	40,000
131 回大会出店料（1 店）一日のみ	5,000
130 回大会予稿集売上	1,166,000
131 回大会予稿集売上	686,000
118〜129 回大会予稿集売上	58,000
合計	2,045,000

雑収入

予稿集コピーサービス等	940
127 号別刷代	20,037
128 号別刷代	4,500
振込手数料超過分	70
2006 年名簿広告掲載料（1 件）	30,000
合　計	55,547

基金からの繰入

2003 年度名簿作成積立金	700,000
2004 年度名簿作成積立金	700,000
2003 年度選挙関係積立金	300,000
2004 年度選挙関係積立金	300,000
合　計	2,000,000

雑益 1,900

※2005 年度未払い分の支払い額が見積額より少なかった.

◇支出内訳（単位：円）

刊行費　　印刷部数　各号共に 2,400 部

内　訳	128 号（206p.）	129 号（328p.）	計（534p.）
印刷費	2,141,370	3,409,560	5,550,930
抜刷代	22,968	33,369	56,337
合　計	2,164,338	3,442,929	5,607,267

※割付・校正料は印刷費に含む

発送費　『言語研究』発送料

	128 号	170,405
	129 号	276,685
合　計		447,090

※追加発送料は含まない

事務委託費　　4,284,000

※2005 年 4 月分～2006 年 3 月分
日本言語学会と中西印刷株式会社により交わされた事務委託内容の覚書に基づく業務の代金

大会関係費

内　訳	第 130 回	第 131 回	計
プログラム印刷費	139,650	139,650	279,300
ポスター印刷費	73,500	73,500	147,000
出欠葉書印刷費	23,625	23,625	47,250
プログラム発送費	205,470	279,040	484,510
大会費	318,075	633,210	951,285
予稿集印刷費	694,050	770,700	1,464,750
	（700 部発行）	（550 部発行）	
「運営委員会からのお願い」印刷費	21,000	—	21,000
講師謝金	80,000	120,000	200,000
合　計	1,555,370	2,039,725	3,595,095

委員会費

通信費	30,260
会議費	162,495
合　計	192,755

編集委員会費

通信費	47,870
会議費	24,730
旅費	76,700
アルバイト費	144,000
合　計	293,300

大会運営委員会費

会議費	44,000
旅費	772,120
合　計	816,120

広報委員会費

通信費	2,257
謝金	383,920
アドレス設定料	10,500
合　計	396,677

常任委員会費

通信費	210
会議費	6,232
旅費	474,260
合　計	480,702

「危機言語」小委員会費

通信費	0
会議費	77,503
旅費	17,540
合　　計	95,043

夏期講座小委員会費

通信費	210
会議費	14,000
旅費	44,000
合　　計	58,210

事務局費

通信費	9,200
旅費	123,320
消耗品費	3,058
事務局長費（含む事務局長補佐経費）	480,000
会議費（会計監査）	27,157
合　　計	642,735

危機言語シンポジウム会計へ支出　903,091

※事務局より危機言語シンポジウム会計へ支出．別記（2005 年度危機言語シンポジウム決算）参照

CIPL 負担金　110,000

東洋学（アジア研究）連絡協議会運営分担金　2,000

通信費

切手購入	117,440
銀行送金通知手数料	40,320
会費請求・督促状送料	37,640
カード手数料・送金手数料	83,960
『言語研究』追加・抜刷・バックナンバー送料	46,255
発表採否通知・司会者依頼状等大会関係送料	129,958
その他（文科省提出書類発送等）送料	4,740
合　計	460,313

消耗品費

文房具（領収証等）購入費	16,801
振替用紙・会費納入願い等印刷費	31,416
封筒印刷費	189,525
合　計	237,742

雑費

未払い金支払い時の追加分	6,300
合　計	6,300

名簿作成費

発送費，通信費	1,033,190
調査用紙，名簿等印刷費	1,433,460
合　計	2,466,650

選挙関係費

通信費	423,520
選挙管理委員会会議費	9,000
選挙管理委員会旅費	45,750
選挙人名簿，投票依頼状等印刷費	354,900
合　計	833,170

（基金へ繰入）

危機言語プロジェクト積立金 300,000

◇ 2005 年度決算　予算・実績対照表

収入　　（単位：円）

科　目	予　算	実　績	対予算差異
会　費	14,250,000	13,630,000	△ 620,000
雑誌売上	1,200,000	1,429,000	229,000
科学研究費補助金	2,600,000	2,600,000	0
預金金利	1,000	2,075	1,075
大会関係収入	1,600,000	2,045,000	445,000
雑収入	50,000	55,547	5,547
基金からの繰入	2,000,000	2,000,000	0
雑　益	0	1,900	1,900
収入合計	21,701,000	21,763,522	62,522
前期繰越金	1,543,470	1,543,470	0
合　計	23,244,470	23,306,992	62,522

支出 （単位：円）

科目	予算	実績	対予算差異
刊行費	7,000,000	5,607,267	1,392,733
発送費	500,000	447,090	52,910
事務委託費	4,284,000	4,284,000	0
大会関係費	3,200,000	3,595,095	△ 395,095
委員会費	250,000	192,755	57,245
編集委員会費	600,000	293,300	306,700
大会運営委員会費	850,000	816,120	33,880
広報委員会費	500,000	396,677	103,323
常任委員会費	500,000	480,702	19,298
「危機言語」小委員会費	300,000	95,043	204,957
夏期講座小委員会費	200,000	58,210	141,790
事務局費	700,000	642,735	57,265
危機言語シンポジウム会計へ支出	0	903,091	△ 903,091
CIPL負担金	110,000	110,000	0
東洋学・アジア研究連絡協議会運営分担金	10,000	2,000	8,000
通信費	500,000	460,313	39,687
消耗品費	250,000	237,742	12,258
雑費	90,470	6,300	84,170
名簿作成費	2,100,000	2,466,650	△ 366,650
選挙関係費	900,000	833,170	66,830
予備費	100,000	0	100,000
（基金への繰入）			
危機言語プロジェクト	300,000	300,000	0
支出合計	23,244,470	22,228,260	1,016,210
次期繰越金	0	1,078,732	△ 1,078,732
合計	23,244,470	23,306,992	△ 62,522

◇資産勘定　　（単位：円）

借　　方	金　　額	貸　　方	金　　額
本部事務局		前受会費	
現金	652,508	国内個人	133,000
みずほ銀行口座	2,453,826	国内学生	91,000
郵便振替口座	1,000,035	国内団体	0
カード	36,075	国内維持	20,000
事務局		在外個人	47,500
事務局口座	0	在外維持	11,000
常任委員会口座	0	未払金	4,076,614
編集委員会口座	306,702		
未収金	1,008,700		
		次期繰越	1,078,732
計	5,457,846	計	5,457,846

※未収金は当該年度内収入の受取が間に合わなかった場合の科目．2005 年度決算の未収金の内訳は以下の通り

内　　訳	金　額
『言語研究』売上げ（松香堂取次分）	1,008,700
合　　計	1,008,700

※未払金は当該年度内に支払われるべき費用が支払われなかった場合の科目．2005 年度決算の未払金の内訳は下記の通り．

内　　訳	金　額
『言語研究』第 129 号印刷費	3,409,560
『言語研究』第 129 号発送費	276,685
『言語研究』第 129 号別刷り印刷費	33,369
事務委託費 3 月分	357,000
合　　計	4,076,614

基金　決算

収入		支出	
科　　目	金　　額	科　　目	金　　額
期首特別会計（前期繰越） 一般会計より繰入 預金金利	11,850,000 300,000 456	一般会計へ支出	2,000,000
収入合計	12,150,456	支出合計	2,000,000
		次期繰越金	10,150,456
計	12,150,456	計	12,150,456

基金　資産勘定　　（単位：円）

借　　方	金　　額	貸　　方	金　　額
みずほ銀行定期預金口座 京都銀行定期預金口座	6,350,000 3,800,456	積立金	10,150,456
計	10,150,456	計	10,150,456

○基金内訳

（単位：円）

2005 年度危機言語プロジェクト積立金	300,000
2004 年度記念大会積立金 *	1,000,000
2004 年度夏期講座積立金 * **	2,000,000
2004 年度危機言語プロジェクト積立金	400,048
2004 年度 e- ジャーナル積立金 *	1,000,000
2003 年度記念大会積立金	1,200,000
2003 年度夏期講座積立金	600,000
2003 年度 e- ジャーナル積立金	1,000,000
2002 年度記念大会積立金	400,000
2001 年度記念大会積立金	400,000
2000 年度記念大会積立金	400,000
2000 年度危機言語プロジェクト積立金	200,000
1999 年度記念大会積立金	500,000
1998 年度記念大会積立金	250,000
1998 年度危機言語プロジェクト積立金	500,000
預金利子積立分 ***	408
計	10,150,048

*2004 年度記念大会積立金 1,000,000 円，2004 年度夏期講座積立金の一部 1,400,000 円，2004 年度 e- ジャーナル積立金 1,000,000 円は京都銀行定期（預金番号 002）に一括して積立.
**2004 年度夏期講座積立金は，みずほ銀行定期（預金番号 035）に 600,000 円，京都銀行定期（預金番号 002）に 1,400,000 円積立
*** 京都銀行定期（預金番号 002）に一括積立の 2004 年度記念大会積立金 1,000,000 円，2004 年度夏期講座積立金の一部 1,400,000 円，2004 年度 e- ジャーナル積立金 1,000,000 円の利息

（単位：円）

記念大会積立金		
	2004 年度	1,000,000
	2003 年度	1,200,000
	2002 年度	400,000
	2001 年度	400,000
	2000 年度	400,000
	1999 年度	500,000
	1998 年度	250,000
夏期講座積立金		
	2004 年度	2,000,000
	2003 年度	600,000
危機言語プロジェクト積立金		
	2005 年度	300,000
	2004 年度	400,048
	2000 年度	200,000
	1998 年度	500,000
e- ジャーナル積立金		
	2004 年度	1,000,000
	2003 年度	1,000,000
預金利子積立分		408
計		10,150,048

○基金内訳（銀行別）　（単位：円）

銀行名	預かり番号	名　目	金額
みずほ銀行	039	2005 年度危機言語プロジェクト積立金	300,000
京都銀行	002	2004 年度記念大会積立金 *	1,000,000
みずほ銀行	035	2004 年度夏期講座積立金	600,000
京都銀行	002	2004 年度夏期講座積立金 *	1,400,000
京都銀行	001	2004 年度危機言語プロジェクト積立金	400,048
京都銀行	002	2004 年度 e- ジャーナル積立金 *	1,000,000
みずほ銀行	038	2003 年度記念大会積立金	1,200,000
みずほ銀行	031	2003 年度夏期講座積立金	600,000
みずほ銀行	037	2003 年度 e- ジャーナル積立金	1,000,000
みずほ銀行	028	2002 年度記念大会積立金	400,000
みずほ銀行	025	2001 年度記念大会積立金	400,000
みずほ銀行	021	2000 年度記念大会積立金	400,000
みずほ銀行	019	2000 年度危機言語プロジェクト積立金	200,000
みずほ銀行	014	1999 年度記念大会積立金	500,000
みずほ銀行	007	1998 年度記念大会積立金	250,000
みずほ銀行	011	1998 年度危機言語プロジェクト積立金	500,000
京都銀行	（002）	預金利子積立分 **	408
		計	10,150,048

*2004 年度記念大会積立金 1,000,000 円，2004 年度夏期講座積立金の一部 1,400,000 円，2004 年度 e- ジャーナル積立金 1,000,000 円は京都銀行定期（預金番号 002）に一括して積立.
** 京都銀行定期（預金番号 002）に一括積立の 2004 年度記念大会積立金 1,000,000 円，2004 年度夏期講座積立金の一部 1,400,000 円，2004 年度 e- ジャーナル積立金 1,000,000 円の利息

2005年度危機言語シンポジウム決算

自　2005年4月　　至　2006年3月　　（単位：円）

収入		支出	
科目	金額	科目	金額
言語学会事務局から入金	903,091	会場代	211,200
		印刷代	197,400
		旅費・日当	191,000
		謝金	246,000
		消耗品	57,491
計	903,091	計	903,091

［別表 2］2006 年度日本言語学会予算

収入		支出	
科目	金額	科目	金額
会費	14,250,000	刊行費	7,000,000
雑誌売上	1,400,000	発送費	500,000
科学研究費補助金	2,300,000	事務委託費	4,284,000
預金金利	1,000	大会関係費	3,550,000
大会関係収入	1,600,000	委員会費	250,000
雑収入	50,000	編集委員会費	500,000
基金からの繰入	2,150,000	大会運営委員会費	850,000
雑益	0	広報委員会費	500,000
		常任委員会費	500,000
		「危機言語」小委員会費	200,000
		夏期講座小委員会費	100,000
		事務局費	700,000
		危機言語シンポジウム費	700,000
		夏期講座費	1,200,000
		ＣＩＰＬ負担金	110,000
		東洋学・アジア研究連絡協議会運営分担金	10,000
		通信費	500,000
		消耗品費	250,000
		雑費	25,732
		名簿作成費	0
		選挙関係費	0
		予備費	100,000
		（基金への繰入）	
		危機言語プロジェクト積立金	0
		名簿作成積立金	700,000
		選挙関係積立金	300,000
収入合計	21,751,000	支出合計	22,829,732
前期繰越金	1,078,732	次期繰越金	0
合計	22,829,732	合計	22,829,732

2005 年度第 3 回「危機言語」小委員会

日　時：2006 年 2 月 11 日（金）11:00〜12:30

場　所：学士会館 309 号室

出席者：遠藤　史，奥田統己，梶　茂樹，金子　亨，呉人　惠，坂本比奈子，佐々木冠，笹間史子，白井聡子，田村すゞ子，千葉庄寿，中山俊秀，宮岡伯人，村崎恭子，渡辺　己

［議事と報告］

（1）　日本言語学会（「危機言語」小委員会）主催公開シンポジウム
同日 13:00 から同会館（2 階 202 号室）にておこなわれた公開シンポジウム「フィールドワークの光と影：今なぜ，危機言語に挑むのか？」の準備状況の確認ならびに打ち合わせをおこなった.

(2)　第 132 回日本言語学会春季大会におけるポスターセッションについて
前回の小委員会では，第 132 回日本言語学会大会では，「フィールドから見えてくる言語の多様性 Part 2」として，「活格，能格，対格言語について」のワークショップをおこなう方向で検討することが合意された．しかし，準備状況などに鑑み，第 132 回は今回のシンポジウムでポスター発表をしていただく遠藤　史，佐々木冠，永山ゆかり，千田俊太郎の各氏に，研究者向けにより専門的な内容になるよう修正を加えて，再度，発表していただくことになった.

（3）　第 133 回日本言語学会秋季大会におけるワークショップ
（2）の決定を受けて，活格言語に関するワークショップは第 133 回日本言語学会秋季大会におこなうことが決められ，準備の進め方について具体的な討議がおこなわれた.

2006 年度第 1 回夏期講座小委員会

日　時：2006 年 6 月 16 日（金）14:00〜17:30

場　所：東京大学教養学部 10 号館 301 号室（会議室）

出席者：坂原　茂，西光義弘，荻野綱男，堀川智也，三原健一，風間伸次郎，日比谷潤子

実行委員：佐藤雄亮，坂田晴奈，張　盛開

［議題］

（1）　夏期講座 2006 に関すること
実施計画の詳細を検討し，必要な準備事項などを確認した.
夏期講座終了後の参加者アンケート，および会計報告のしかたについて相談した.

（2）　今後の夏期講座に関すること

次期夏期講座は，京都で 2008 年 8 月に開催する予定.

関東と関西の隔年開催を原則とするが，数回に 1 回は，合宿形式で他地域での開催も考慮する.

（3） 夏期講座小委員会に関すること

一部委員の交替および委員長の交替について審議した.

（4） 6 月 17 日の言語学会委員会での報告事項の検討

第 132 回大会

期　日　　2006 年 6 月 17 日（土）・6 月 18 日（日）

会　場　　東京大学（駒場キャンパス）

第 1 日（6 月 17 日）

開会挨拶および公開特別企画

開会の辞		会　長
開催校挨拶		木 畑 洋 一
会長就任講演		
日本語アクセントの再建		上 野 善 道
シンポジウム		
「主語」	司会	坂 原　茂
主語プロトタイプ論の再検討	講演者	大 堀 壽 夫
文法分析の四つのレベル （意味役割，格，情報構造，統語機能）とその再検討		角 田 太 作
日本語の主語規定・主語の認識論的存在論的実質		尾 上 圭 介

第 2 日（6 月 18 日）

口頭発表・ポスター発表・ワークショップ

◦ A 会場

（A 1）	10：00〜	WH-doublets in Hokkaido/ Hakodate-Japanese	山 田 真 寛
（A 2）	10：35〜	名詞前置型数量詞句と名詞句上位の 機能範疇について	永 末 康 介
（A 3）	11：10〜	Neg を c- 統御する「不定語＋も」	片岡 喜代子
（A 4）	12：40〜	「とりたて」要素の分布と意味の相関 ―対照・理論言語学的観点から―	田 川 拓 海 沼 田 善 子 森　芳 樹
（A 5）	13：15〜	並行的解釈における要素間順序と 文脈依存性	戸 次 大 介
（A 6）	14：00〜	日本語の wh- 疑問文に関する 機能的制約：「誰が来るか？」 はなぜ容認されないのか？	赤 澤 美 佳 渡 邊　信
（A 7）	14：35〜	日本語の“Subcomparatives” ―その容認される条件とは―	吉本 真由美
（A 8）	15：10〜	「可能」の意味構造 ―「使役型」と「自発型」―	山 口 和 彦

◦ B 会場

（B 1）	10：00〜	ロマニー語の指示詞 KA と定性標示	鮎川敏明
（B 2）	10：35〜	スンバワ語の指示詞	塩原朝子
（B 3）	11：10〜	チベット語アムド方言の従属構文（NI 節による）における名詞句指示	海老原志穂
（B 4）	12：40〜	談話中に現れる間投詞 アノ（ー）・ソノ（ー）について	堤　良一
（B 5）	13：15〜	「テモラウ」構文における「ニ - ガ」交替と構文拡張	澤田　淳
（B 6）	14：00〜	ウズベク語諸方言における敬語	古屋　薫
（B 7）	14：35〜	フィンランド語の不定詞における主語標示について	坂田晴奈
（B 8）	15：10〜	Investigating the Future of Finnish Congruency-Focus on Possessive Morphology	NIENDORF Mariya

◦ C 会場

（C 1）	10：00〜	アパブランシャ語自動詞文における能格性について	山畑倫志
（C 2）	10：35〜	上ソルブ語 dać 使役文における被使役者のマーキング	笹原　健
（C 3）	11：10〜	タガログ語の自他交替	長屋尚典
（C 4）	12：40〜	日本手話におけるアスペクト―語の内在アスペクトと運動形式の関連を中心に	佐伯敦也
（C 5）	13：15〜	電子通信手段の発達に伴う，メッセージを数える助数詞の変化	飯田朝子
（C 6）	14：00〜	サハ語（ヤクート語）の主格目的語／対格目的語の違い	江畑冬生
（C 7）	14：35〜	The Distribution of Nominative Case in Modern Irish	牧　秀樹 オボイル ドナル
（C 8）	15：10〜	譲渡不可能所有構文の移動派生分析	中本武志

◦ D 会場

（D 1）	10：00〜	現代韓国語のアスペクト形式における‘-ko iss-’について―現代日本語「―ている」の分析に対して―	金　京愛
（D 2）	10：35〜	韓国語の否定文の統語構造	崔　珍賀

（D 3）	11：10〜	日韓語のオノマトペにおける音象徴について―「急止」と「響き」の音韻的特徴―	ヤン ジョンヨン
（D 4）	12：40〜	日英語のイントネーション・ユニットとその多機能性―統語的分断を引き起こしているのは何か―	作田千絵 藤井聖子
（D 5）	13：15〜	デンマーク語モーラ不要論	三村竜之
（D 6）	14：00〜	中国語の「文フォーカス構造」について―韻律を中心に―	相原まり子
（D 7）	14：35〜	1人称複数代名詞における除外と包括の対立―漢語諸方言を中心に―	張 盛開
（D 8）	15：10〜	対照言語学の観点から見た人称制限の普遍性―日中感情表現の対照を通して―	王 安

◦ E 会場

（E 1）	10：00〜	韓国江原道平昌・旌善郡のアクセント	孫 在賢
（E 2）	10：35〜	韓国蔚山（ウルサン）方言の名詞のアクセント体系	姜 英淑
（E 3）	11：10〜	韓国語尚州方言のアクセントの特質	李 連珠
（E 4）	12：40〜	韓国語 jida が表す自発と可能―日本語ラレル，北海道方言ラサルとの対照―	円山拓子
（E 5）	13：15〜	韓国語と日本語東北方言の「回想」の表現について	高田祥司
（E 6）	14：00〜	朝鮮語延吉方言の終結語尾 -k’uma について	呉 春姫
（E 7）	14：35〜	韓国語と日本語の指示詞における範疇解釈について	金 善美

ワークショップ　14：00〜16：00

◦ F 会場

The World Atlas of Language Structures (WALS) and Typological Analysis

企画者・司会者　堀江　薫

The World Atlas of Language Structures: Visualization of Linguistic Diversity and Indispensable Research Tool	Haspelmath Martin
Toward a Typology of EAT Expressions in Languages of Asia:	Pardeshi Prashant

Visualizing Areal Features through WALS
Diversity of Cases: Using the World　野瀬昌彦
Atlas of Language Structures (WALS)
指定討論者　角田太作

◦ G 会場

空間移動表現の類型論的研究―直示移動表現を中心に―
企画者　守田　貴弘
司会者　ラマール　クリスティーン

日仏語の直示表現と類型内の多様性　守田貴弘
中国語の移動表現に見られる選好パ　相原まり子
ターン―日本語と比較して―　ラマール クリスティーン
英語，ドイツ語，ロシア語における　古賀裕章
直示移動表現―日本語と比較して―　コロスコワ ユリア
青木葉子
水野真紀子

ポスター発表　11：40〜13：40
◦ H 会場

慣習的言語表現との関係に着目した　坂本真樹
新奇表現の意味解釈に関する研究　野田誠一
Anaphoric System of Kuching-Malay:　山田真寛
An Alternative View of the Local　小谷早稚江
Reflexives in Malay　ショーン マディガン
接続助詞言いさし発話の理解プロセス　横森大輔
発言の核心を隠蔽する言語スタイルと　海上智昭
してのカタカナ語―あいまいさへの依存―

特別展示　11：40〜13：40
◦ H 会場

少数言語の文法研究から見えるもの―その 2―
企画　「危機言語」小委員会

コリマ・ユカギール語使役文の構造　遠藤　史
水海道方言の文法から見えてくるもの　佐々木　冠
こうすればもてる！―アリュートル語　永山ゆかり
の所有表現―
ことばが分ける二つ，組合せる二つ　千田俊太郎
―ドム語（パプア・ニューギニア）―

◇退　　会

国内個人会員	57 名
在外個人会員	1 名
国内団体会員	4 名
国内学生会員	2 名
在外学生会員	1 名

◇　本誌は，独立行政法人日本学術振興会平成 18 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を得て刊行されたものである．